

# 日本における園芸療法の実情と海外の園芸療法の実際

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	小浦,誠吾
発行元	養賢堂
巻/号	88巻1号
掲載ページ	p. 51-55
発行年月	2013年1月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 日本における園芸療法の実情と海外の園芸療法の実際

小浦 誠吾\*

〔キーワード〕: 園芸療法, 園芸福祉, 社会園芸学,  
資格制度

### 1. 園芸療法の歴史的背景と アメリカにおける園芸療法

1600年初期には、園芸療法のための植物園が英国のオックスフォード大学に設立され、18世紀には、米国の精神科医療の父と呼ばれるベンジャミン・ラッシュ (Benjamin Rush) 博士は、「土を掘る行為は精神病患者に治療効果がある」と、園芸療法が精神疾患を持つ人々に効果があることを公式に報告した (Horne 1974)。その後、20世紀にはいと各国で園芸療法的な治療行為が散見され、精神科だけでなく外科の身体障害系の疾患にも採用され始めた (Ringle 1997)。

米国では1940年代から1950年代にかけて、入院中の退役軍人へのリハビリテーションとして広く実施された。第二次世界大戦開始当初の中退役兵のための病院では、園芸療法は治療項目に入っていなかったが、徐々に社会復帰に向けた園芸療法の多面的な効果が認められるようになり、退役兵のためのリハビリテーションとして注目されるようになった。その後、様々な国において様々な名称および考え方で園芸療法的な活動が広がっていき、それぞれの主義・主張がある。とくにイギリスでは、1792年には精神病院ヨーク収容所で小動物の飼育と共にガーデニングが取り入れられており、早くから自然の力を治療に活用しようとする動きが認められていた。

しかしながら、後に述べる資格制度の確立などの面において世界をリードしてきたのはアメリカであるため、園芸療法の起源や歴史的背景はアメリカ園芸療法協会 (AHTA) の見解を中心に、日本で園芸療法の実践を最初に行ったとされるグロッセ (1995) の解説に沿って述べることとする。

#### <起源>

古代エジプトにおいて、医者が患者に対し庭園散策を薦めていたことが判明している (Melwood

Horticultural Training Center 1980)。その後、18世紀以降には草創期、変革期を経て近年の成長期を迎えることになる。

#### <草創期>

18世紀～20世紀半ば第二次世界大戦までの時期を指し、主に精神障害者や精神薄弱者を収容している施設で、自給自足や患者の日課を目的にスタートした。この頃から農作業が、治療効果にもつながることが認められはじめたとされている。イギリスの Leonard Maeger 医師は、早くから園芸の療法的効果を認めており、1699年には「暇な時間があつたら、庭に出て穴を掘ったり、座ったり、草取りをしなさい。これほど健康を保つのに良い方法はない」と述べている。

#### <変革期>

第2次世界大戦およびベトナム戦争におけるアメリカにおいて、心身ともに大きなダメージを受けた傷痍軍人のリハビリテーションや職業訓練 (社会復帰支援活動) に園芸が作業療法の中に導入され、成功を収めた。特にベトナム戦争におけるゲリラ戦法に苦しみ、目の前で仲間が殺されたり、自分自身も身体に障害を受けたり24時間気の休まらない状況で精神面での障害を抱えた傷痍軍人は、当時の精神医学や作業療法では、いわゆる社会復帰という前向きな感情にならなかったとされている。そのような状況下で園芸活動は、作業療法の考え方にのっとり行われたため、作業療法と結びつき、園芸療法が再評価されていく。それに対する解釈と応用範囲が急速な広がりを見せ、アメリカでは大学における園芸療法士講座が誕生した (第二次世界大戦～1970年まで)。

#### <成長期>

アメリカでは National Council for Therapy and Rehabilitation through Horticulture (NCRTH 1973)、イギリスでは Society for Horticultural Therapy (HT, Thrive 1978) が生まれ、園芸療法の推進と療法士の育成を目的とする専門機関が誕生した。治療効果の

\*九州保健福祉大学 保健科学部 作業療法学科 (Seigo Koura)

みならず、子供・老人を含むなんらかの障害を負う人びとの社会的権利や生活の質(QOL)の向上ということにも目が向けられはじめた。京都大学農学部蔬菜花卉園芸学研究室の資料(1982)によると、NCRTHの目的は、①園芸を治療法として使うことに関心を持つ人々のネットワークをつくる、②園芸療法とリハビリテーションプログラムを開発する、③園芸療法士の専門的技術の進歩、向上をはかること、であった。そして、1987年この協議会が「The American Horticultural Therapy Association」(略称AHTA;「アメリカ園芸療法協会」)と改称され、世界最大とされる園芸療法協会として現在に至っている。

## 2. 人間・植物関係学、社会園芸学の 考えの普及経緯

松尾によると、1983年AHTAにHome Horticulture and Urban Horticulture(家庭園芸・都市園芸) Working Group(以降W.G.)が結成され、Sociohorticulture and Horticultural Therapy(社会園芸学と園芸療法) W.G.(「社会園芸学」の元)と、Floriculture Education(花き園芸教育) W.G.が結成され、1983年には、バージニア州立工科大学のD. Relf(レルフ)博士らは、Home Horticulture(家庭園芸) W.G.をConsumer Horticulture(消費者園芸) W.G.と改称し、生産物を使う人の重要性を訴えた。そして1990年にRelf博士は、「人間の幸福と社会の発展に対する園芸の役割」という初の国際的なシンポジウムを開催し、「人間・植物協議会: People-Plant Council (PPC)」が結成された。

1991年には、「Hort Technology」に、Socio horticulture Section(社会園芸学部門)が設置され、1997年4/6月号からHuman Issues in Horticulture部門となってこの分野で1セッションを占有してい

る状態が継続している。園芸療法が含まれるIPPS(International People-Plant Symposium)は、表のようなスケジュールで世界各国において開催され、2004年は日本の淡路でも開催されている。また、いずれも国際園芸学会(ISHS: International Symposium Horticultural Science)の共催を受け、トロントと開催予定のブリスベン大会は国際園芸学会本会(IHC: International Horticultural Congress)における開催となる。

## 3. 各国の園芸療法の実態と 資格制度の確立への動き

人間・植物関係学の国際会議が世界各国で開催されているように、世界各国における園芸や農業との良好な関係を保ちつつ、その多面的な効用を人間の幸福(福祉)や保健・医療に生かしていこうとする動きはアメリカだけではない。いわゆる園芸療法や園芸福祉の考え方は、世界各国でそれぞれの特徴をもって広がっている。

### (1) アメリカ・カナダの園芸療法の現状と資格制度

アメリカ・カナダにおける園芸療法の実践場となるのは、きっかけとなった退役軍人のための病院・施設での活動も継続されているが、主に精神科や身体的リハビリテーション病院で実施されている。それに伴い、実用化されている評価表として最初に確立したのは、ニューヨーク州立大学ラスクリハビリテーションセンターが作成した評価表であるが、その71の評価項目の内28が機動的・身体的項目であり、17が認知的項目である。

その他、認知症専門病院・施設や発達障害児病院・施設およびターミナルケア施設など多様な場面でも実施されている。この地域特性とも言えそうなのが、アルコールを含む薬物依存症患者や家庭内暴

表1 IPPSの開催年と開催場所

開催	開催年	開催場所	開催	開催年	開催場所
1st	1990	Alexandria, VA, USA	7th	2002	Toronto, Canada
2nd	1992	Newark, NJ, USA	8th	2004	Awaji, Japan
3rd	1994	Davis, CA, USA	9th	2006	Seoul, Korea
4th	1996	San Antonio, TX	10th	2010	Truro, Nova Scotia, Canada
5th	1998	Sydney, Australia	11th	2012	Venlo, Netherlands
6th	2000	Glencoe, IL, USA	12th*	2014	Brisbane, Australia

\*開催予定

力やレイブなどによる PTSD や引きこもり者に対する園芸療法であろう。なかでも研究データが多数報告されているのは、認知症を含む老年期障害分野における園芸療法の適応であり、その効果を期待してアルツハイマー型認知症患者のための病院には「パラダイスガーデン」という専用のガーデンが併設されることが多い。施設には、他にも多様な庭や園芸スペースが存在するが、オールドファッションガーデンなどの名称で、施設利用者の世代に合った植物や備品をそろえ、いわゆる自然な回想法的な効果も狙っているケースも多く認められる。

この地域での活動場所の確保は、広大な敷地を生かした本格的な農業・園芸スペースであろうと思われるが、実際の対象者は何らかの障がいや苦痛を有している方々であるため、建物の入り口付近等のフリースペース、ベランダおよび屋上などの緑化による活用を取り入れているケースが多い。その場合、園芸作業が行いやすいようにレイズドベッド（立ち上がり花壇）の考え方や自助具の考えにより工夫された園芸用品を活用することが基本となっている。

アメリカ・カナダに共通して言えることだが、臨床場面においては、作業療法助手などの立場で就労するケースもあるため、その場合は登録資格（HTR など）の有無にこだわらない関係者も多いのが現状である。

1987年に AHTA は、設立と同時に同協会が認定する公的認定資格制度を確立した。資格制度としては、登録資格である Registration ランクの制度のまま現在に至っているが、臨床実践と座学の両方が要求される。カンザス州立大学の農学部園芸学科園芸コースおよび大学院には、「園芸療法コース」があり、そこでの単位と様々な臨床実習の補足によっても、獲得ポイントに沿った資格が与えられる。

HTA：短大卒程度の資格（園芸療法助手）。

HTR：大学卒程度の資格（園芸療法士）。実習が 2000 時間に満たない人は HTR-Pro。

HTM：大学院卒程度の資格（高等園芸療法士）。

尚、カナダ園芸療法協会（CHTA: Canadian Horticultural Therapy Association）は、インターンシップ、就職の斡旋や教育プログラムを実施しているが、資格制度は AHTA の制度を活用している。

(2) 欧州における園芸療法の意識と資格制度の考

## え方

イギリスは、園芸療法の考え方としての歴史は最も古い国であるが、組織化されたのは 1978 年「HT」から進化した「Thrive」という小規模の全国慈善団体の創設が最初とされており、「障害をもった人々の生命を支えるガーデニング（広義の園芸）」をスローガンとしている。活動主要項目に、「療法とリハビリテーション」が含まれ、園芸療法の考え方での普及・活動を推進している。アメリカ同様様々な場面での適用が個々みられており、中でも、海外からの研修者を多く受け入れ、教育・普及活動を積極的に行っている。日本においても、講習会を実施し認定書を発行しているが、公的な資格認定への動きは見られない。

一方、知的発達障害者のための「スペシャルオリンピック」に参加するための訓練としても園芸療法を活用している点も特徴の一つであろう。

ドイツでは、「Garten und Therapie (Garden and Therapy)」という組織があり、自然と人間の関係学的な取り組みが進んでいる。森林セラピーが保険保養の対象となっており、その中に園芸療法的な活動も含まれている。そのためか、園芸療法士の資格制度などの動きは顕著ではない。

欧州全体での園芸療法に関する動きをみると、2006 年～2010 年の 5 年間「コスト・アクション 866 グリーンケア」というプロジェクトにおいて、「人間の心身の健康と生活の質を改善する目的で農業と緑の世話を実行する」というポリシーが掲げられた。最終年となった 2010 年の大会は、ドイツの Witzenhausen で開催され、大会のスローガンは「科学的な知識を増やす」ことであった。しかしながら、本質的なエビデンス（立証データをもとにした成果）の構築にはさらに時間が必要という印象であった。

現在、欧州に「コスト・アクション 866 グリーンケア」に続く大型プロジェクトは存在していない。医療・保健・福祉分野においては、人間と自然との共生を健康に生かすのは当然という考えが背景にあり、園芸療法士の資格制度への関心も全体的に広がらない要因の一つになっているようである。

### (3) 韓国における園芸療法の現状と資格制度

韓国園芸療法協会（KHTA: Korean Horticultural Therapy Association）は、2 年間の準備期間を経て

1999年に正式に設立された。その後園芸福祉の考え方も導入し、園芸療法と園芸福祉の概念を統合した形で韓国園芸療法園芸福祉協会（略称は同じくKHTA）を2007年に立ち上げた。

発足当初のKHTAは、韓国国内に園芸療法を普及させることに全力をあげ、現在①アドバンス園芸療法士、②園芸療法士レベル1、③園芸療法士レベル2および④園芸福祉士といった4つのレベルの資格制度が存在する。2012年現在、園芸療法士の有資格者数はおよそ2,000人にのぼり、いろいろな人々のために社会福祉組織、作業療法リハビリテーション施設、病院、保健所、学校などおよそ1,700の施設で実施されている。まだ常勤での就職口が少なく給与面などの課題もあるものの、園芸療法士の資格制度が国家資格を得て医療保険対象の療法として認められるために、KHTA関係者一同が努力し続けている。

このように韓国の資格制度の考え方が世界でも進んだ理由として、資格制度が乱立せずKHTAに統一されていること、多数の大学・農業大学校などの教育機関のプログラムとして園芸療法が学べること、大学院のマスターコースやドクターコースでの実践活動がすぐに事例報告として学会で多数報告されることなどがあげられる。

### (3) 日本における園芸療法の現状と資格制度

1990年頃より、日本でも短大・大学で講義が開講され、2002年9月より淡路景観園芸大学（現兵庫県立大学）がコースを開講し、大学卒業程度の者が1年の履修により兵庫県の「園芸療法士」の資格が取得できることになった。開学当初は、卒業後さらに1年程度の有給の実践（2000時間以上）を行うことで、アメリカ園芸療法協会のHTRが取得できたが、このシステムは現在廃止されている。

2002年度より、全国大学・短期大学実務教育協会（JAUCB）が、一定のカリキュラムを終了した場合は園芸療法士の任意資格を取得することができるシステムを構築した。その他任意に資格制度を構築する団体が複数現れたため、人間・植物関係学会が各種資格を統合することを目的に、学会認定の資格制度を2005年4月に制定した。具体的には、園芸療法アシスタント（HTA）、登録園芸療法士（HTR）、高等園芸療法士（HTM）の申請受付および試験が開始された。2008年には人間・植物関係学会から独立

する形で「園芸療法学会」が設立され、資格制度はそのまま「園芸療法学会」に移行することになった。

国家資格である作業療法士を育成する作業療法学科において、九州保健福祉大学と大阪河崎リハビリテーション大学では、全国で初めて2007年度からJAUCBの園芸療法士の資格が取得可能となった。九州保健福祉大学では、在学中（3年生修了後）に申請可能であり、ダブルライセンスとしてすぐに勤務可能である。一方、河崎リハビリテーション大学では卒業後作業療法士の資格取得確認後に申請が可能となる。

### 4. アメリカ・韓国・日本における園芸療法士の資格制度からみた日本における園芸療法の今後

日本の園芸療法のレベルは他国同様まちまちであり、資格制度の統一もなされていない状況では、当面は作業療法士などの医療側からアプローチを行うリハビリテーションの専門家と組んで活動することが必要となる。しかしながら、医療側からのアプローチだけでは園芸療法の多面的な効用を十分に生かすことは困難であり、栽培や園芸植物に対する知識や活用方法のアイデアは、農業・園芸側からのアプローチがあるとさらに充実することは間違いないため、一日も早い園芸療法士の真の独立が望まれる。

日本における学会組織であるJHTAを中心に、多様な資格制度の統一を目指すことが、資格制度のレベルアップにつながるものと考えられる。実際に、最も国家資格の制度確立に近いとされている韓国には、KHTA以外の資格を排出す機関は存在しないし、先行していたアメリカは意志統一ができず足踏み状態である。

その上で、①患者への心身の医療・保健・福祉の効用をさらに普及させ、②養成校は、一般人対象のプログラムと看護師、作業療法士、介護福祉士などの専門職別のプログラムを構築することでどの分野からも勉強できる仕組みを構築し、③介護手法専門園芸療法や認知症などの症状別の専門園芸療法士を養成する。などの考え方で全体のレベルアップを進めていくことが必要と考えられる。実際の研究成果として、日本独自の知的障害者授産施設用の評価表（小浦2003）や表情の変化がわかりにくい認知症患者などに対する笑いのフェーススケールが開

発されている (Koura 2006)。このような研究を推進していくことで、日本独自の園芸療法や園芸福祉の普及が可能となるはずである。そのようなエビデンスの構築がなされた場合、日本における園芸療法士として、診療報酬対象の国家資格を目指す体制作りができるものと期待される。

### 引用文献

- Brascamp, W. and J. L. Kidd 2004. Contribution of plants to the well-being of retirement home residents. *Acta. Hort.* 639: 145-150.
- グロッセ世津子 (編) 1995. 「イギリスにおける園芸セラピー」. (財) 日本緑化センター. pp. 147-176.
- Horne, D. C. 1974. An Evaluation of the Effectiveness of Horticultural Therapy on the Life Satisfaction Level of Aged Persons Confined to a Rest Facility. *Clemson, S.C.: Clemson University Press.*
- Koura, S., K. Yamagishi., S. Nagae., M. Toyoda and T. Hara 2006. Improvement in Educational Motivation of Students through Horticultural Therapeutic Experiments at Some Welfare Facilities for Aged People. 27th IHC(International Horticultural Congress & Exhibition). Seoul, Korea. Abstract. pp.389
- 小浦誠吾・榎木羽衣子・永田一起・谷岩かおりら 2003. 知的障害者授産施設における園芸の療法的な活用を導入する試み 3—調査票の検討と実践活動の意義. *人間・植物関係学会雑誌 3 (別)*: 10-11
- 松尾英輔 1998. 「園芸療法を探る —癒しと人間らしさを求めて—」. *グリーン情報*. pp.41-42.
- Melwood Horticultural Training Center 1980. "The Melwood manual -A planning and operations manual for horticultural training and co-op programs". pp.264.
- Lewis, C. 1996. *Green nature human nature: The meaning of plants in our lives.* University of Illinois Press, USA.
- Rappe, E. L. 2004. Plants in health care Environments: Experience of the nursing personnel in homes for people with dementia. *Acta. Hort.* 639: 75-81.
- Ringle, W. 1997. Growing Citizens: The Role of Gardens in Women's Prison. *Journal of Therapeutic Horticulture*. 8: 36-44.
- Stoneham, J. A., A. D. Kendle and P. R. Thoday 1995. Horticultural Therapy: Horticulture's contribution to the Quality of life of disabled people. *Acta Hort.* 391: 65-75.
- 豊田正博 2007. 「高齢者を対象とした園芸療法評価表の開発」 (東京農業大学博士後期過程学位論文).
- 豊田正博・松尾英輔 2005. 高齢者福祉施設における園芸療法の評価表についての考察. *人間・植物関係学会雑誌 3 (別)*: 18-19.
- Ulrich, R, S. 1984. View through a windows many influence recovery from surgery. *Science* 224: 420-421.
- 山根 寛 2003a. 「園芸リハビリテーション」. 医歯薬出版. pp.32.
- 山根 寛 2003b. 「園芸リハビリテーション」. 医歯薬出版. pp.72-81.